避難者の中に新京大学のロシヤ語の先生であった酒田ご夫妻がおられたことも幸いであった。ソ連軍と日本人の通訳を申し出てくれて、この家は難民収容所につき無断でソ連兵の出入りが出来ないようにソ連憲兵隊の許可を取ってくれたり、難民救済の兵舎内の売店や、理髪店または街にスーパーなどを開店してこれらの事業で何百人という多数の人々が辛うじて一年間の飢えをしのぐことになったのである。

このような状況の中で一年が過ぎ、ようやく待ちあぐねていた帰国が決まり市内の日本人が地区別に十二班に分かれ出発、我々は昭和二十一年八月三十一日に出発することに決まったのである。政変のたびに軍票が使えなくなったり、暴徒に襲われる家があったり、毎日ドラマ以上の出来事ばかりであったが我々の収容所は殆ど大きな被害もなく過ごすことが出来た。今思うと両親や、酒田ご夫妻のご努力と苦労、また収容者の皆さんの結束のたまものと頭の下がる思いである。

収容者の女性が家族のために現地の菓子業者と結婚した人、軍事郵政で家族寮に移住し、スパイ容疑でメーデーの昼下がり公園で銃殺刑になった夫妻、終戦の翌朝収容所裏庭で自爆した警護隊の山田さん、中国八路軍に入った若い人など、これら幾人かを除き八月三十一日の正午過ぎ、チチハルの駅をあとにしたのであった。家で飼っていたシェパード犬が新しい飼い主と駅まで見送りに来ていたが、我々を見ると列車の後を追ってどこまでもついて来たがいつの間にか姿が見えなくなってしまっていた。母と妹が名前を呼んで泣いていたのが忘れられない。

十月の初旬、日本に到着した。他国の地で無念の思いを残して亡くなった方々の霊安かれと祈るとともに、これからも絶対に風化させてはいけない歴史の幾ページであったのだと強く感ずる昨今である。

満州から引揚げるまでの労苦に耐えて

北海道　宮　腰　ふ　み

北満近くの城西河という所でした。

平和を裂かれたのは二十年の七月の或る日主人が召集になりました。ちょうど私は身重で他国での出来事不安の中に八月二日長女を出産しました。隣り近所の方のお世話になり無事に済みました。

ちょうどお七夜の八月九日一時避難命令がでて、家から何も持ち出すこともなく出ました。それが永久とは思いませんでした。鶏西の駅に来て高台の我が家の方を見ましたら火の海でがっかりしているところに、爆弾が落ちあわやのところで逃げのびました。

空を見ればソ連機が襲撃しているのが見え、どのようにして無蓋車に乗ったか夢中の汽車の中でした。まだ夏の盛りで暑さも暑かったが、寒さより良いと思いました。でも子供の顔はむくみ目もあけず乳も良く飲むことが出来ない有様で、やっと牡丹江まで一時避難しました。

その辺一帯は火の海でした。もう駄目と思い出来るだけ身を軽くし、持った物も捨てたりしました。明け方今度は客車に乗継ぎ十五日間、鉄嶺へ向かう途中、何度か暴動に遭い守るのは男の老年者ばかりで心細かった。ときにはソ連軍が車中に入り目ぼしい物を持って行かれた人もいました。

何より困ったことは木陰がないので便所と子供のおむつの洗濯には弱りました。やっとの思いで鉄嶺に着きました。そのときたくさんの兵隊さんが貨車に乗りどこか知りませんでしたが行きました。その頃やっと敗戦を知りました。

奉天が近いと聞きましたが行かれず今の長春に引き帰すことになりました。駅に行けば身ぐるみ剥がされるとの話で、高い土堤を登りあいにくの雨の中を何時間歩いたか知れませんが、子供を前に下げ少しの荷を持ち、あの苦しさは今思い出してもぞっとします。

着いたら親子共ずぶ濡れになり着替えもなしでいましたら、日本人がいて世話をしてもらいました。やっと落着いてから市街より三十分以上も歩き、満鉄の社宅とかに三、四世帯で入れられました。後で聞きましたが家の中の物は何にも持って出ないといってましたが私達が入ったときは何にもありませんでした。

近くには旧日本軍の糧秣倉庫があり、昼夜を問わず、

ソ連人や中国人の出入りが激しかった。

そのうちに生活も大変になったので、心をきめ子供を背負いたばこ・パン・菓子等を売るため、朝五時前に家を出、仕入れて帰るのは九時頃という有様でした。公園のようなところで商売をするので、帰りにはソ連兵に売上げを狙われたことなど幾度かありましたが、やっと切り抜けることが出来ました。

日一日と寒くなり栄養失調と寒さで事前に掘った墓も足りなくなりました。三月頃から八路軍と中国軍の戦いがあり私たちの所が戦場となり外へ出ることが出来ませんでした。

四月の中頃子供が急病になり医者もなく一夜にして亡くしました。その頃そろそろ日本に帰れる話が出ましたが、何日のことかわからないので満人の家に働きに出ました。帰ると白い衣類にゴマのようにシラミが付いて弱りました。そんなことより、すこしは心配でしたが町の方へ働きに出ました。

中国兵の炊事仕事でした一日十円でしたが日本人の家と同じ所で安心でした。人間とはその人との付き合い方だと思いました。中国人と見くびらず精一杯仕事をしました。心が通じたのか日本はまだ治安が良くないから帰るなと言われました。どうせ死ぬなら日本でと思い、帰ると言いましたら皆から二、三百円頂きやっと子供を火葬にすることと、帰りの千円が出来ました。

新京を出発して船に乗るまで一か月、その間三か所の収容所を転々、やっとコロ島より佐世保に入港しましたが、船内の死者が多かったので港外に一週間以上置かれ上陸。北海道に着きました。車中食券ももらいましたが弁当も買えずにいましたら秋田県の或る駅でおむすびを頂きあのおいしさはいまも忘れられません。

家族さがして五か月目

福島県　面川三良

当時、国策として海外移住が奨励されており、私も青雲の志を抱き、渡満を決意し、昭和十三年五月三十一日づき、本牧郵便局を辞し、六月七日満州国はハルビン市